

滋賀県

二つの草津川が教えてくれたこと

滋賀大学教育学部附属中学校 三年

前田 彩希

私の家族には、夏休みに草津川の上流のオランダ堰堤あたりで遊ぶ、という毎年恒例の行事があります。家の近くにも草津川の下流が流れています。いつも「どちらにも川なのに全く違う雰囲気だな」と感じていました。

オランダ堰堤のさらに上に歩を進めると、ふっと人気がなくなつた静寂に包まれた別世界が広がっています。そこは隠れ家のようなでした。ある日、その場所にあつた石の近くでカニを見つけました。私は数秒間、そのカニに目を奪われました。小さいながらも一生懸命に力強く動く姿。その背には、光が反射していました。背の色は、周囲と同化する灰色。そのときだけ、その色が奇麗に見えました。そういえば、堰堤の近くでよく見かけるメダカのような魚たちもそんな色をしていました。彼らはこの川の色そのものでした。彼らにとって、ここはひとつだけの住処。川は様々な生き物がそれぞれ共存して生きているのだとその時改めて思い知らされました。

私の家の近くを下流が流れ、そして、川の水は琵琶湖に流れ出ます。その途中に、たくさん生物が住んでいます。しかし、だんだん上流から下流に下るにつれて、川がコンクリートで整備されています。また、ごみが所々に見られるようになります。同じ草津川ですが、上流と下流の表情の落差に、私の心は追いつきませんでした。上流は山の中、下流は住宅街の中を通っているからだと思います。人間の営みが発展しているほど、川本来の輝きを失っていることを目の当たりにし、胸が締め付けられる思いがしました。

調べてみると、ごみは、川に流れてしまうと魚や鳥に悪影響を及ぼすらしいことがわかりました。ごみからは生き物の体に

悪影響を与える物質を発生するおそれや、釣り客が残していくごみや釣り針を誤って飲み込み亡くなってしまうことがあるそうです。さらに、湖は汚れが溜まりやすい、という特徴もあります。少しの人工的な汚れだけでも、そこを住処としている生物の命を脅かしてしまうかもしれないのです。

私の通っていた小学校では、毎年「琵琶湖清掃」の日がありました。その当時、「なんでこんなことをしなければならいのだろうか。」と疑問でした。でも、今は違います。琵琶湖に住む生物のために、また、琵琶湖から流れていく川の生物やその川周辺に住む人々が変わらぬ日常を過ごせるように、私たちは清掃をしていたのだと、気づきました。

琵琶湖は「近畿の水がめ」と呼ばれたりします。瀬田川から宇治川、淀川を通り大阪府までつながっています。その道中で、多くの人々にその水が使われます。「琵琶湖の水止めたるか」というジョークもあるほどです。この言葉の裏には、滋賀の琵琶湖が下流の人々の命を支えているという責任が隠されていると思います。途中の川には、生物が共存しています。もちろん、その輪の中には人間も含まれていると私は考えています。今、琵琶湖の湖岸や川にごみを捨てると、というマナーの欠けた人がいますが、その少しずつの積み重ねが、生物の存続の危険をさらに大きくしているのではないのでしょうか。私たち人間も、その中の一部分です。例えば、身近なものだと、料理するとき、お風呂に入るとき、洗濯をするときなど、水は私たちの生活には欠かせないものです。実はそれは、川に住む生物たちも一緒でした。彼らも私たちと同じです。目をつむると、あの川の冷たい感触と、あたたかい風、そして、川で遊ぶ人々の笑い声が蘇ってきます。

かつて私が「なんでこんなことを」と感じた清掃に、これからは責任を持って参加したいと思いました。あのカニを照らした光を守っていくために。